

随想

メタバースとウォークマン

(株)PQC研究所 加藤 宏光

メタバースという言葉が最近よく耳にする。最初にこの単語に触れたのはいつ頃だったろうか？ たぶん何かのテレビコマーシャルだったように記憶している。バーチャル××といった表現と共に、Googleを目に当てた登場人物とGoogle内の仮想世界を題材とした商材であった。著者の世代からするとこのような実感を伴わない世界は、強烈な異質感が故にどうしてもなじめないように感じられた。

それから何年かして《メタバースが次世代の経済を左右する》といった解説が目に見えて増えてきた。『違和感を持っていても、そのうち無視できなくなるだろう』と思っている昨今で、日経新聞に《メタバースが描く近未来、七面・オピニオン》《メタバース狂騒曲(二〇二二

年三月二十九日・二面、三十日二面》が掲載された。

これだけ社会で取り上げられているモノであれば、もはや無視はできない。そこでこの《メタバース》の語源から調べてみた。メタは高いという接頭語、バースはユニバース。この言葉を創出したのはニール・スティーブンスン(注1)という小説家であり、SF小説《スノウクラッシュ》という小説の題材として取り上げた仮想空間に名付けたものであった。

驚いたのは、メタバースなる造語が三〇年前、一九九二年の昔であったことである。そこで、早速スノウクラッシュなる小説を購入(注2)、読んでみた。とにかく違和感満載のこの小説にざっと目を通すだけで三週間ほどかかった。もともと、違和

感の故に集中できなかったためでもあるが…。

この原稿を書くのに新聞を読んだから一月もかかった所以である。小説の内容は、この原稿主旨とは相当離れるので紹介を割愛するが、三〇年にも前に仮想空間にアバター(分身)を置いて、現実世界と仮想空間を行き来する発想には天才的なひらめきを感じる。

本題の日経記事に戻る。時系列では逆になるが、メタバース狂騒曲1,2を先に述べる。

その1の最初は米メタ(旧フェイスブック)CEOのザッカーバーグ氏。彼はメタバースを《他人と一緒に過ごせる仮想環境で、見るだけでなく中に入ることが出来るインタートネット》と定義している。米メタはメタバースへの巨額の先行

投資で二〇二一年十二月期のメタバース部門営業部門・一、〇〇〇億を上回る赤字を出したが、この部門に新しい成長を託す新たなプラットフォームとして力を入れ続けている。

三月十六日にテキサス州のテクノロジー祭典でのメタバースの生みの親、ニール・スティーブンスンが講演終盤で、『メタバースは近い将来の技術を包含する便利な用語になつていくが、流行がいつまで続くかわからない』と指摘している。しかし、これに関するアプリ急増等から市場の狂乱とする見方もある(米センサータワー・ストラテジスト、ステファニー・チャン)。

投資も活発で、たとえばメタバース・ゲーム開発会社の株式評価は九か月で三倍に。現時点での収益化ではゲームが先

行する可能性が高いとされる(米ウエドブッシュ証券アナリスト、ダニエルアイブス)が、六年後のメタバース市場規模が八・二九億ドルに達するとする予測もある。たとえとして《5Gは建物等があると電波が届きにくい。仮想空間で事前に確認すれば基地局の設置の効率化等に繋がり、普及に弾みがつく》等さまざまな分野で活用の機運が高まる。しかし二〇〇〇年代に流行・失速したセカンドライフとの類似性も指摘される。

その2ではネット上の仮想店舗。顧客がアバターを操作し仮想店舗を移動して、同じくアバター店員の接客を受ける。ほしい商品はネット通販のサイトで購入する。紹介例は、開店後一年の三越伊勢丹のバーチャル伊勢丹である。一九九〇年代一〇兆円あった百貨店市場は二〇二一年には半分以下になった。バーチャル百貨店は消費者離れを食い止める試金石である。また、歌舞伎にコンピュータ・グラフィックで作った屋敷等の映像を合成して生配信する《メタ歌舞伎》を松竹が試みた。コロナ禍で集客できない時期の

苦肉の策で新しい分野への試行錯誤が続く。

三月二日のオピニオン欄は《メタバースが描く近未来》としてジェイマイマ・ケリーによるイギリス・フィナンシャル・タイムズ掲載記事の翻訳紹介である。内容は、米メタのイメージを介して、メタバースの現状に迫ろうとするものである。短くCM内容を述べると《Googleを着けたぬいぐるみの犬が主体で、彼はこのGoogleの中でかつての仲間と再会し、バーチャルな顧客の前でかつて仲間と組んだバンドを再現し演奏する。しかし現実の彼は、暗い空間でGoogleを着けてポツンと一人

でいるだけ》というものである。彼女(ケリー記者)の印象では米メタ(ザッカーバーグ氏)は『現実の人生が最悪でも恐れることはない、代わりに偽の人生を持てるので安心できる』というようなものだ、としている。おそらく大半の人はザッカーバーグ氏の売りたい世界に身を委ねる用意はできていない。だが大きな権力と経営資源、データを支配するザッカーバーグ氏

が機は熟しているかもしれないと考えていること自体が不気味だ、と結んでいる。

先に紹介した1,2の記事では、正直メタバースの何が凄いのかはわからない(ゲーム世代でないからか?)。ブームの根拠はよくわからない。とにかく投機でもうかるから…という金の動きとしてのメタバースブームは何か受け止められるが、実際の社会にどのような影響を与えてくるのかはどうにも理解の域を超えている。

正直、あの不格好なGoogleをのぞいている姿は異様に感じられる。しかし、時間の経過が慣れを生むことはこれまで随分経験した。

四〇年近く前に大ブームとなったウォークマンや携帯CD、MDからの音楽をイヤホンで聞いている人たちを、当初違和感を持って見ていたが、現在では電車でイヤホンをスマートフォンに繋ぎ、音楽を聴いている人々に乗り合わせても、何ら違和感を持たない。むしろ、イヤホンから漏れる音が高いと迷惑と思ってしまう自分がいる。慣れてしまえば、メタバース用

Googleも当たり前前の存在になるのだろうか!?

注1・ニール・スティーブンスン 一九五九年アメリカ(メリーランド)生まれ。ボストン大学で地理学と物理学を学び一九八四年に小説家デビュー。近年は技術関係のノンフィクションも多い。

注2・Amazon この本をAmazonで購入。最近書店で購入するより、Amazonで書物を購入することが多い。Amazon創業者、ジェフ・ベゾスが若き頃、わが国の宅急便のヤマトに勤めたことがある、というエピソードが昨日知った。宅配の発想がわが国から生まれたこと、ジェフ・ベゾスという天才がそれを世界的なプラットフォーム企業に仕上げたことを考えると、日本で生まれたフロップイディスクの発明が日本で無視され、IBMによつてコンピュータ媒体として一世を風靡したこと等を併せて、わが国の持つウィークポイントを示唆する気がする。

(61) 鶏の研究 <2022> 第97巻・第6号